

ゼミナール（担当教員：安達貴教）についての説明

安達貴教

名古屋大学大学院経済学研究科社会経済システム専攻

平成 26 年 11 月 4 日

1. 内容

本ゼミナールは「産業組織論」をテーマとし、まず

Kenneth E. Train (2008) *Discrete Choice Methods with Simulation*, Cambridge University Press (著者のページ <http://elsa.berkeley.edu/books/choice2.html> からダウンロード可能なので参照のこと) を輪読することによって、研究に必要とされる計量経済学の知識を習得し、その後、*Handbook of Industrial Organization*, Vol.3

<http://www.sciencedirect.com/science/handbooks/1573448X>

の中から関連する幾つかのサーヴェイを選択、順次輪読する。更に、厳選された学術論文を精読し、実証分析の手法をパッチワーク的に学んでいく。学生はそれと並行して、Perl や Python といったスクリプト言語によるオンライン上データの自動収集の方法や、R や Stata といった統計処理ソフトウェアの活用方法、更には、推定プログラムを書くための C++, Fortran, Matlab といった数値処理ソフトウェアへの習熟が求められる。従って参加者は、プログラミングの経験があることが望ましく、また複雑なプログラミングをも厭わない根気が求められる。

以上から明らかなように、本ゼミナールは、経済学や経営学の教科書を和気藹々と「オベンキョウ」するという、日本の経済学部において至極ありがちなゼミナールの運営スタイルとは異なり、工学部や理学部などにおけるような研究室体制に倣い、学術研究が本来的に社会的貢献として成しうるもの、即ち、学術的アウトプットの生産を最終的な目的とする。私は今まで、経済学部「産業組織」における期末試験の問題作成を、自らの研究の創発の機会として捉え、結果として、今までのところ、

“Complementing Cournot’s Analysis of Complements: Unidirectional Complementarity and Mergers” (coauthored with Takeshi Ebina), *Journal of Economics*, 2014 年（平成 23 年度・問題 3)

“Double Marginalization and Cost Pass-Through: Weyl-Fabinger and Cowan Meet Spengler and Bresnahan-Reiss” (coauthored with Takeshi Ebina), *Economics Letters*, 2014 年（平成 23 年度・問題 2)

という二つの学術論文を、期末試験の問題から派生させる形で著してきた。同様に、本ゼミナールでの研究成果も最終的に、審査制の英文学術雑誌への公刊を目指す。昨今、過剰な「社会貢献」や「啓蒙」が大学に期待される中であって、むしろ、学術研究への地道な貢献を通じて学生が自己の見識を深め、以って、それを卒業後の各自のキャリアの場にあ

って活かす、その土台形成の場を提供することこそが大学の本懐とすべきところであり、それが上述の成果を求める理由でもある。

2. 運営方法

毎回のゼミでは、上記教科書の輪読に加えて、英語で発行されている週刊新聞の記事のディスカッション（30～50分ほど）を行う。輪読のレジュメ担当者は事前に指定せず、毎回、サイコロか何かでランダムに決める。従って、参加者全員が十分な準備を行った上で、毎回レジュメを用意していなければならない。新聞記事のディスカッションにおいては、レジュメを用いないが、各参加者が事前に内容を把握していることを前提とする。

曜日・時間は、**水曜以外の曜日の4限+**を予定しており、**開始時間は2時45分、終了時間は5時半前後を目安とする。それ以降の時間に予定（アルバイトなど）を一切入れないこと。**

3. 単位取得要件

毎回、ゼミ開始時に出欠を取る。欠席は通年で3回まで認める。但し、欠席する場合は、ゼミ開始時刻までに、理由を含めて私に電子メールで連絡すること。これを怠った場合、単位を取得することは出来ない。演習開始時から10分までを経過しても出席がなされていない場合は欠席と看做すので、10分を超えて顔を出しても出席にはならない。4回を超えて欠席した者、あるいは、参加態度に著しく欠陥が認められる者も、単位を取得することが出来ない。

年度末に、4年生は所定の手続きに従い、卒業論文を提出すること。3年生は、卒業論文計画書を私に提出すること。これらの提出のない場合、単位を取得することは出来ない。なお、後者の詳細に関しては、追って連絡する。

4. 選考方法

参加希望者は、以下の書類を提出すること。

- a. 成績表
- b. プログラム言語の利用経験についての簡単な説明
- c. テーマ自由の3000～4000字程度のエッセイ
- d. ここ数年で読んだ本の中から3冊を選んで、それらを挙げたリスト。一冊ごとに、自身による400字程度の書評を付すこと。なお、最低1冊は経済学関係の書籍を含めよ。

エッセイの内容と面接の応答によって判断し、私が本演習参加のための基準に達していない、あるいは提出者自身の執筆が疑われると判断する者の参加は認めない。また、面接実施前に、剽窃発見ソフトウェア（大学から本学の教員に支給されているもの）を用いることによって調べ、エッセイと書評における剽窃の可能性についてチェックする。剽窃が疑われる者については、面接の際にこれを厳しく問い質す。また、原則的に、自身のラップトップを面接の際に持参し、プログラミング技術のデモンストレーションを行ってもらう。

5. その他の注意事項

- a. 私は、指導学生から、帰省や旅行から帰ってきた際の土産、盆暮れの付け届け、ヴァレンタインズ・デイのチョコレート、あるいは各種推薦状に対してのお礼など、いかなる物品も（親御さんからのものも含めて）一切受け取らない（在学中、卒業後を問わず）。手作り菓子、花束、色紙といった類もこれに含まれる。なお、郵送されてきた場合には、料金着払いで返送する。執拗な行為に対しては、学内のハラスメントセンターに苦情処理の申し立てを行うので留意されたい。
- b. 在学中は、年賀状・年賀メールなどの時候の挨拶やバースデー・メッセージの類を私に一切送らないこと（そもそも私の誕生日を教えることはないが）。なお、卒業後に送ることは構わないが、返信するとは限らない。また、結婚式に招待されても、出席することは決していない。
- c. 私のフェイスブックのアカウントを見つけたとしても、「友だち申請」はしないこと。もし「友だち申請」が送られてきても、アクセプトすることはない。
- d. 私は、学生の学業以外の相談には一切応じないので、注意すること。これに関するメールが送られてきた場合には無視する。執拗な行為に対しては、上記 a と同様に、学内のハラスメントセンターに苦情処理の申し立てを行う。
- e. 本演習は、平成 23 年度から募集を開始し、平成 23、24、26 年度の参加者はいずれもゼロである（平成 25 年度は募集をしていない）。